

バイバイ

伊藤貴晴 作

【登場人物】

男1 幽霊
男2 死神
男3 演劇部員
男4 超常現象研究部
男5 演劇部部长
女1 新生

【1】

放課後の教室。演劇部の活動場所。
黒板に「バイバイ」と書いてある。
女1が黒板の文字を見つめている。

【2】

女1と男1登場。

女1 絶対信じない
男1 どうして？
女1 どうして？ 信じられるわけじゃないでしょ
男1 ねえ、本当に俺のこと見える？
女1 こっちにこないで
男1 見えるんだろ？
女1 見えるからこうやって話してるんじゃない
男1 じゃあ信じてくれるの？
女1 信じない
男1 何だよ？
女1 だって、ありえないじゃない
男1 何でそうやって最初から決めつけるんだよ
女1 下らないイタズラはやめて
男1 イタズラじゃない
女1 からかって遊んでるだけなんですよ
男1 違うよ。話を聞いてくれ
女1 近寄らないで。それ以上近づいたら舌嚙んで死んでやるから
男1 分かった。分かったから落ち着いて
男1 間。
男1 どうしたら信じてもらえるかな？

女1 証拠は？
男1 証拠？
女1 どうしてあなたが幽霊だって言えるの？
男1 証拠って言われてもな
女1 ほら、やっぱり嘘なんだ
男1 違うよ。おかしいんだ
女1 何が？
男1 普通、俺の姿は見えないはずなんだ
女1 見えてる
男1 だよ？ 見えてるよね？ これってすごくない？
女1 何がすごいのか全然分からない
男1 だって、今まで誰にも見えなかったんだよ。何で見えるんだよ？
女1 私に聞かないでよ
男1 普通じゃないよね。あ、普通じゃないんだ
女1 何が？
男1 あんたが
女1 バカにしてるの？
男1 冗談だよ
女1 帰る
男1 ちよつと待ってよ
女1 どこが幽霊なのよ？ どこからどう見ても普通じゃない
男1 普通だよ？ 悪い？
女1 悪いかって言われると…
男1 幽霊って言っても、普通の人と変わらないよ
女1 そうなの？
男1 うん。何か特別なことができるわけじゃないし
女1 じゃあ、幽霊だつてこと証明できないじゃない
男1 だから普通は姿が見えないんだって
女1 見えてるもん
男1 何で見えるの？
女1 知らない
男2登場。

男2 見つけた
男1 やべ
男2 何で逃げるんだよ。ほら、行くぞ
男1 嫌だよ
男2 何でだよ
男1 誰が何と言おうと俺は行かない
男2 わがまま言うなよ。こっちだつて大変なんだぞ
男1 知らないよ、そんなこと
男2 面倒くさい奴だな
女1 あの
男2 え？
女1 あなたたち、何なの？
男2 あ、俺の姿は見えてるんだ。あのね、一人でこうやって喋ってて怪しい奴
女1 だな、とか気持ち悪い奴だな、とか思うかもしれないけど、これにはちよ
男2 つと事情があつて
男1 なあ、なあ
男2 何だよ
男1 この子、俺のこと見えてるよ
男2 バカ言うな。そんなことあるわけないだろ
女1 やつぱり普通は見えないものなの？
男2 え？
男1 ほら
女1 さつきこの人、幽霊だつて言つてたけど、冗談でしょ？
男1 本当だよ
女1 二人でからかつてるだけじゃないの？
男2 本当に見えるの？
女1 うん
男2 何で？
男1 分かん
女1 あなたも幽霊なの？
男2 違つよ
男1 死神だよ

女1 死神？
男2 そう。死神。死んだ人の魂を冥界に連れて行くんだ
男1 で、今は俺にまわりついてる
男2 変な言い方するなよ。それが仕事なんだから
男1 ストーリーかよ
男2 お前が逃げるからいけないんだろ
女1 信じられない。幽霊で、死神？
男2 まあ、いきなり信じろつていう方が難しいんだけど
女1 確かにそうだな
男1 頭痛くなつてきた。やつぱり今日は帰るわ
男2 ちよつと待つてよ。せつかく見える人に会えたんだから
男1 生きてる人と関わつちやダメだよ
女1 いいだろ少しくらい
男1 私は遠慮したいわ
女1 だよ
男1 冥界に行くんでしょ？ 早く連れてつてもらいなさいよ
男2 何でそんなこと言うんだよ
男1 ほら、この子もこうやつて言つてるし
男2 お前は引つ込んでろ
女1 何だと
男2 わけの分かんないことに巻き込まないですよ。私がここに来たのは
男3 登場
男3 あ、お邪魔しました
女1 あの、ちよつと待つてください
男3 何ですか？
女1 演劇部の方ですか？
男3 そうですけど
女1 私、入部したいんです
男3 え、本当に？
女1 はい
男3 いやあ、嬉しいな。今年はずいに新入部員ゼロかと思つてたけど。あ、ど

うぞ座って。(男2に) 君も入部希望？

いや、俺はそういうのじゃなくて

男3 そうなの？ 遠慮しなくていいよ。入ってみたら？ 楽しいよ、演劇部

男2 いや、ちよっと

男3 俺は二年生の男3。よろしく。他に三年の部長が一人います

女1 二人だけなんですか？

男3 恥ずかしながら廃部寸前です

女1 そうなんですか

男3 やめるとか言わないでね。お願いだから

女1 いや、それは大丈夫です

男3 そう、よかった

女1 あの、ひとつ質問があるんですけど

男3 何？

女1 そこにいる男の人、見えますか？

男3 (男2を指して) 彼？

女1 いえ、そうじゃなくて。こっちの

男3 誰もいないよ？

女1 見えますか？

男3 誰かいるの？

女1 はい

男3 キミ、もしかしてアレ？何か見えるの？

女1 自分ではそういうつもりはないんですけど

男3 いや、いいんだよ。霊感とか、そういうのあったって。僕は苦手なんだけどね、幽霊とか。でも、演劇部はどんな人でも受け入れられます

男1、男3の鞆を漁る。

男1 ジャンプ発見(※1)

男2 勝手に漁るなよ

男3 何？ え？

女1 どうしたんですか？

男3 俺のジャンプが宙に浮いてる。どうなってるんだよ

女1 やっぱ見えないんだ

男1 だからそうやって言ったろ。これで信じた？

女1 信じるしかないわね。本当に幽霊なんだ

男3 幽霊？ いるの？

女1 ええ

男3 何でだよ。出てっつてよ

男1 あ、こち亀(※2)

男2 読んでるんじゃないよ

男3 あんたは？ あんたは普通の人だよな？

男2 あ、俺は死神

男3 死神？ 何それ？

男2 死んだ人を冥界に連れて行くんだ

男3 そんな奴はいない

男2 いるんだよ。俺がそうだって

男3 死神って、あれだろ？ 変なノート持って、ノートに名前書くと、その人が死んじゃったりするんだろ(※3)

男2 違うよ

男3 ほら、違うんじゃないか

男2 そうじゃない。だから

女1 死神って、生きてる人の魂を奪っていくとか、そういうのじゃないの？

男2 ううん。死神は人を殺したりしない

男3 騙されないぞ

女1 だから

男2 あなた、本当に死神なの？

女1 うん

女1 何で制服着てるの？

男2 制服着てれば学校にいても不自然じゃないでしょ

女1 まあね

男2 見えなくすることもできるけど、見えてる方が便利なこともあるからね

女1 で、あいつを連れて行かないかやいけないんだけど、言うこと聞いてくれな

女1 いんだ

女1 ふーん

男3 ダメ、絶対ダメ。入部は許可できません

女1 どうして？

男3 幽霊お断り
 男2 だから俺は幽霊じゃない。死神だよ
 男3 死神もダメです。そういう類はなし
 女1 私、普通です。こんなのと一緒にしないで
 男2 こんなのと何だよ
 男1 ハッハッハッハ
 男2 笑ってんじやねえよ
 男3 とにかくダメです。幽霊とか怖いから。それに
 女1 それに？
 男3 幽霊の話なんかしているとヤツが来る
 女1 ヤツ？
 男4登場。
 男4 お邪魔するよ
 男3 やっぱり
 女1 誰？
 男4 どうも、超常現象研究部部长、男4です
 男3 誰にあいさつしてるんだよ
 女1 また変なのが出てきた
 男4 おや、そちらの方々は？
 女1 新入部員です
 男2 え？
 男4 新入部員？ 今にも潰れそうな弱小演劇部に入りたいたなんて、ずいぶん奇特な人間がいるんだね
 男2 あの、俺は違うんだけど
 男3 お前のとこみたいな怪しい部に言われたくないね
 男4 ウチはこれでもちゃんと活動してるんだよ。潰れかかって活動もままならないどこかの部と一緒にしないでほしいな
 男3 ムカつく
 女1 何なの？ この人
 男1 何か気持ち悪いよ、あいつ
 男2 お前が言うな

男3 帰れよ、邪魔だから
 男4 そう邪険にするなよ。今日は改めてお願いに来たんだから
 男1 断る
 男2 だからお前が言うなって
 男3 どうせあの話たる？
 男4 分かっているなら話が早い。この部屋を我々超常現象研究部に譲っていただきたい
 男3 嫌だね
 男4 どうして？ いい話だと思うけどな。お前だってこんなとこにいたくないだろ？
 男3 幽霊なんているわけないだろ
 男4 いるんだよ。愚鈍な人間は目に見えるものしか信じようとしない。これだから凡人は困る
 女1 どういうことですか？ 幽霊なんているわけないって
 男3 ああ、それは
 男4 僕が説明してあげよう。この部屋には幽霊がいるんだ
 女1 (男1に) あんた？
 男1 そうだよ
 男4 ここでは常識では理解できない様々な怪奇現象が起こる。まずポルターガイスト
 女1 ポルターガイスト？
 男2 物が勝手に動いたりする心霊現象だよ
 男1 へえ
 男4 本が宙に浮いたり、チョークが勝手に文字を書くなどの事例が報告されている
 男3 噂だろ、そんなの
 男4 多数の生徒がその現象を目撃している。噂や見間違いで済まされることではない
 女1 あんたがやったんでしょ？
 男1 うん。暇だったから本読んだり、黒板に落書きしたりしてた
 男2 ダメだろ、そんなことしちゃ
 男4 さらに興味深いのは「占い」と呼ばれる現象だ
 男2 占い？

男4 「占い」と書かれた箱の中にクラスと名前を書いた紙を入れておくと、いつの間にか占いが書かれている
 男3 そんなの、どっかの誰かがこっそりやってるんだよ
 男4 一体誰がそんなことするんだ？ いたずらにしては手が込んでる。そんな暇な奴がいるとは思えないな
 女1 あんたがやってるんでしょ？
 男1 うん。暇だから
 男2 ダメだろ、そんなことしちや
 男3 誰が信じるんだよそんなもの。そんな占い当たるわけないだろ
 男4 とんでもない。恐ろしいことに、悪いことほどよく当たる。階段から落ちたり、何も無いところから黒板消しが降ってきたり、弁当のおかずがなくなったりするんだ
 女1 へえ
 男1 それも俺がやった
 女1 分かっている
 男2 ダメだろ、そんなことしちや
 男4 これらはまだ調査中の事例だ。だからこそ我々超常現象研究部が真相を究明しなければならぬのだよ
 男2 それでこの部屋を欲しがってるの？
 男4 その通り。こんな身近で怪奇現象が起こるなんて、なんて素晴らしいんだ。演劇部なんかに使わせるのはもったいない
 男1 何、こいつ幽霊マニアなの？
 男2 そうみたいだな
 男1 気持ち悪い
 女1 この部屋って、何なんですか？
 男3 よく分からないんだ
 女1 分からない？
 男3 昔は美術の授業とかやってたらしいけど、今は使ってなくて物置になってて、それで部室にしてると言うか勝手に使ってると言うか
 男4 不運だねえ。幽霊騒ぎで部員がこっそり辞めたそうじゃないか。今じゃ呪われた演劇部って言われてるんだろ？
 女1 そうなんですか？
 男3 うん

男4 だからここはさっさと譲って他に移ればいいだろ。我々はここで心霊現象をじっくり観察させてもらう
 男1 え？ 何？ 俺、観察されるの？
 女1 そうらしいね
 男1 ストーカーじゃん
 男4 科学では説明できない不可解な現象。これこそロマンだ。さあ、早くこの教室を明け渡せ
 男2 こいつ、相手にするの面倒臭い
 女1 私も今そう思った
 男3 他に移れるならとつくにそうしてるさ。もう場所がないんだ
 男4 だったら演劇部など潰れてしまえ
 男1、ジャンプで男4を殴る。
 男4 痛つ。ん？ ジャンプが。見ろ、ジャンプが浮いてるぞ。これがこの部屋のパワー
 男1、さらに男4を殴る。
 男4 痛い。やめろ
 男1 帰れ、気色悪い
 男4 今日のところはこれで引き上げるが、また来るからな。さらばだ
 男4退場。
 男2 何か変な奴だな
 男1 俺、あいつ嫌い
 女1 私も嫌い
 男3 あいつとはずっとこうなんだよ。腐れ縁というか
 男2 ずっと？
 男3 小学校からずっと
 女1 かわいいそう
 男1 最悪だな

男2 昔からああなの？
 男3 そうだよ。上から目線で偉そうだし
 女1 何かムカつくよね
 男1 ガツンと言ってやらなきやダメだよ
 男3 おまけに怪奇現象マニアだろ。俺は怖いのが苦手なのにさ。嫌になるよ
 男2 何であんなのと友達なの？
 女1 好きで友達やつてるんじゃないよ
 男1 あの人、友達いるの？
 男3 いないんじゃないの？
 男1 できるなら縁を切りたい
 男2 そりゃそうだ
 男1 だったら何とかしようぜ
 女1 どうするの？
 男1 川に流すとか
 男2 何だよ、それ？
 男3 とにかく関わりたくない
 男1 土岐川とかいいと思うよ
 女1 だったらそうやって言ったらいいんじゃないですか？
 男3 無駄だよ。本気にしてくれない
 男2 面倒な奴だな
 男1 だから土岐川に流そうよ
 男3 できるならそうしてやりたいよ
 男1 だろ？
 男3 あれ？
 男1 え？
 男3 あんた誰？ いつからいるの？
 男2 え？
 女1 もしかして、見えるんですか？
 男3 見えるって？
 女1 この人
 男3 うん、見えるけど
 女1 この人が
 男2 幽霊です

男1 こんにちは
 男3 えー？
 男3 間。
 男3 普通だね
 男1 普通だよ
 男3 もっと怖い人だと思ってた
 男2 別にそう怖くはないと思うよ
 女1 多少うつつとうしいくらいね
 男2 でも、どうして見えるようになったの？
 男1 俺に聞くなよ
 女1 あなたが何かしたんじゃないの？
 男2 何にもしてないよ
 男3 幽霊って、普通は見えないんだよね？
 男2 うん
 女1 でも私、最初から見えてたよ
 男3 どうして？
 女1 さあ？
 男1 で、どうする？
 男3 何が？
 男1 さっきのあいつ
 男3 あいつがどうかした？
 男1 ちよつと痛い目に遭わせてやろうよ
 女1 どうするの？
 男1 土岐川に流す
 男1 間。
 男1 ちよつと行ってくる
 男1 退場

男2 ダメだよ、そんなことしちゃ

男2退場。

女1 行きましょ

男3 え？

女1 ほら、早く

男3 あ、うん

女1、男3退場。

男5登場。箱の中から紙を取り出し、読む。

男5 今日は何をやってもうまくいかない一日。口は災いのもと。余計なことを

言つて周りの人を怒らせてしまうかも。そんな時はバナナを食べてリフレ
ッシユ。ラツキーカラーは紫。ラツキーアイテムはヘルメット。クリスタ
ルキングの「大都会」を歌うと素敵な気分になれるかも(※4)

男5退場。

【3】

女1、男1登場。

女1 どーすんの、アレ？

男1 どーするつて言われても、どうしようもないんじゃない？

女1 何であんなことになっちゃうわけ？

男1 偶然って怖いね

女1 全部あんたがやったんでしょ。階段下りてるヤツの足元にバナナの皮置い
てさ

男1 すこい落ち方したよね

女1 演劇部の人が見て笑い出して、ヤツがキレてさ

男1 バナナの皮の投げ合い

女1 たまたま通りかかった校長の顔に
バナナの皮が
ベチャって

二人、笑う。

男1 二人が黙っちゃって

女1 校長が怒って

男1 泣きそうになつてたよ

女1 今頃校長室で説教だね。かわいそうに

男1 それぐらい当然だよ

女1 そう？

男1 演劇部をバカにするからだよ

女1 何？ あなた演劇部の味方なの？

男1 当たり前だろ。俺だって演劇部だったんだから

女1 え？ そうなの？

男1 言つてなかったっけ？

女1 聞いてないよ

男1 だつて聞かれてないもん

女1 そんなこと聞かれないでしょ

男1 聞いてよ。「何年生？」とか「部活は？」とか

女1 幽霊が部活に入るの？

男1 入つたつていいだろ

女1 あなた、本当に演劇部だったの？

男1 そうだよ

女1 ここの生徒だったんだ

男1 うん

女1 だからここの制服着てるんだ

男1 そういうこと。そういえば、まだ名前聞いてなかったな

女1 え？

男1 名前は？

女1 女1か。俺は男1

女1 男1ね
男1 うん。よろしく
女1 よろしく

男3、男4登場。

男3 だから、あれは俺じゃないって
男4 お前以外に誰がいるっていうんだ
男3 知らないよ、そんなの
男4 俺が転ぶの見て笑ってたろ
男3 あんなおもしろい転び方したら、誰だって大笑いするだろ。今時バナナの皮で転ぶヤツなんかいるか？
男4 おかしいだろ。あんなどこにバナナの皮が落ちてるなんて
男3 それで転ぶ方がよっぽどおかしいんじゃないの？
男4 絶対お前らの仕事だ
男3 違うって言うてるだろ
男4 自分の部がうまくいかないから八つ当たりしてるんだろ
男3 帰れ、うっとうしい
女1 うっとうしいね
男1 うん、うっとうしい
男4 あんな下らないことするのは、お前らしいないだろ
男3 人のせいにするな
男4 じゃあ誰がやったんだ
男3 ……幽霊がやったんだよ
男4 そんな非科学的な答えて納得すると思ってるのか？
男3 お前、超常現象研究部だろ
女1 すごい理不尽
男4 案外、幽霊騒ぎもお前らのイタズラだったりしてな
男3 何だと？
男4 あれだけの怪奇現象があったら、普通は怖がって逃げ出すはずだ。それなのにまだここに居座ってるってのは、おかしいんじゃないのか？
男3 だから言うてるだろ。他に場所がないんだって
男4 それだけの理由で？ 怖がりのお前が？ ちよつと変だろ、それ

男1 お前が一番変だよ
男3 もういいから帰れよ
男4 いいや、尚更帰れなくなった。これは問題だな
女1 どういうこと？

一連の心霊現象は演劇部の仕事だという疑惑がある以上、我々超常現象研究部にはその謎を解明する義務がある

どんな義務だよ

関係ないって言うてるじゃない。勝手なこと言わないで
だったら本当に幽霊が犯人だという証拠は？

見たでしょ、ジャンプが飛んでるとこ

何かのトリックじゃないのか？ 演劇部だったら人を騙すのは得意だろ

そんなことできるんだったら今頃新入部員がわんさか入ってるよ

うん、そうだろうな

何なの？ さっきから。幽霊、いてほしいんじゃないの？

いてほしいさ、もちろん。しかし真相を究明するのが我々の義務だ。その

ためにはまず演劇部にここを退去してもらいたい

どうして？

演劇部がここからいなくなっても怪奇現象が起こるなら、演劇部が犯人じゃないと認めてあげよう

そうやって、結局追い出すつもりなんだろ

その通り。さあ、出て行ってもらおうか

男5登場。占いにあった物を身につけている。

男5、**「大都会」**を歌う。

あ、さっきバナナくれた人だ
あなたが取ったんでしょ

いいだろ一本くらい

部長

部長？

この人が？

何やってたんですか、部長

男5、**「大都会」**を歌う。

女1 何？ 何なの？

男4 何か気持ち悪いぞこいつ

男1 お前が言うな

女1 あんたもよ

男3 何やってるんですか？

男5 これだよ

男5、占いの紙を見せる。

男3 今日は何をやってもうまくいかない一日。口は災いのもと。余計なことを

言つて周りの人を怒らせてしまうかも。そんな時はバナナを食べてリフレッシュ。ラッキーカラーは紫。ラッキーアイテムはヘルメット。クリスマス

ルキングの「大都会」を歌うと素敵な気分になれるかも

あ、それ俺が書いた

男1 お前か

男3 口は災いのもとなんだ

女1 信じてるんだ、占い

男5 そりや信じるさ。この占いはよく当たるんだぞ

男4 そう、その通り。さすが部長だ、よく分かってる

男5 何だお前、また来たのか？

男4 はい、今日はお願いがあつて来ました

男5 断る

男4 まだ何も言つてないじゃないか

男5 この部屋が欲しいって言うんだろ？

男4 その通り

男3 部長、こんな奴の言うこと聞いちやダメですよ

男4 お前は黙つてろ。どうです？ 悪い話じゃないと思っけどな

男5 そうか？

男4 部長が入らなくて困ってるんでしょ？ この部屋のせいで

男5 ま、それは確かに

男4 だったらこんなところはさっさと出て行った方がいい。出て行ってくれるなら、それなりのお礼はしますよ

男5 本当か？

男3 部長

男5 じゃ、バナナ買ってきて

男3 部長、そんなのでいいんですか？

男5 だってバナナがもうないんだ

男3 バナナなら後でいくらでも買ってあげますから

男5 本当だな？

男3 はい

男5 すまん、今の話はなかったことにしてくれ

男1 何なんだこの人たち

男4 我々にはこの部屋が必要なんです。この部屋が我々にとってどれほど価値

があるか、部長さんなら分かってもらえはす

男5 そりやもちろん

男4 だったら

男5 ダメ

男4 どうして？

男5 占いは俺の日課なんだ

男4 え？

男5 この部屋から出て行くと、占つてもらうのに不便だろ？

男4 そんな理由？

男5 うん。こんな素晴らしい部屋を手放せるわけじゃないじゃないか

男4 よかったわね、占いにファンがいるわよ

男1 期待されると書きにくいな

男3 部長、素晴らしいです

男4 そんなわがままが通用すると思つてるのか？

男1 あんたも十分わがままだよ

男2 登場。

男2 何で俺を置いて行くんだよ

男1 あれ？

男3 あ、さっきの人

男2 何で俺だけ校長先生に怒られなきゃいけないの？

女1 すっかり忘れてた
 男2 忘れてていいの？ 校長室で説教されたんだよ？ 俺、悪くないんだよ？
 男4 ああ、すまん
 男2 すまん。済んだら警察はいらないんだよ。何で勝手に逃げるんだよ。バナナぶつけたのお前だろ？
 男4 違うよ、あいつだよ
 男3 人のせいにするなよ。お前だろ
 男4 元々お前がいけなんだろ
 男2 もういい。帰る
 男1 まあ落ち着けて
 男2 そもそもお前が勝手なことするからいけないんだろ。見えないからって変なはずらしたりして。俺がどれだけ迷惑してると思ってるんだよ
 男4 誰に向かって話してるんだ？
 女1 ねえ、落ち着いてよ
 男3 すみませんでした
 男4 悪かったよ。謝るから許してくれよ
 男2 もういいよ
 男4 おい、こっちがこうやって謝ってるのに、その態度はないんじゃないか？
 男2 うるさいな、帰れよ幽霊オタク
 男4 俺はオタクじゃない。マニアだ
 男1 あ、怒った
 男4 俺のどことがオタクだつて言うんだ。説明してみろ
 男2 どこからどう見てもオタクだろ
 女1 何がどう違うのか全然分からない
 男4 物を知らない愚物が。もっと勉強しろ
 男2 うるさい。気持ち悪いんだよ
 男4 失礼な。俺のどことが気持ち悪いって言うんだ
 女1 どことがって言われると
 男2 喋り方とか、仕草とか
 男1 顔とか
 男3 全部だよ
 男4 もう我慢ならん。演劇部なんか廃部にしてやる
 男2 何だと？

男4 そもそも演劇部なんかがあるからいけないんだ
 男3 そんなことできると思ってるのか？
 男4 元々潰れかかった部だ。我々の力を使えばたやすいことだよ。覚悟しろ
 男1 覚悟するのはお前だ
 男1、ジャンプで男4を殴る。
 男4 痛い、痛い。何なんだ。何でこの幽霊、俺のこといじめるんだ
 女1 嫌われてるんじゃない？
 男4 そんな
 男1、黒板に「エンゲキブに手を出すな」と書く。
 男5 諦めるんだな。この幽霊はウチの新人部員だ
 男4 幽霊が部員？ なんて羨ましいんだ
 女1 あの、ひとつ質問していいですか？
 男4 何だ？
 女1 超常現象研究部って、部員はどれくらいいるんですか？
 男4 間。
 男2 あれ？
 男3 どうした？
 男5 超常現象研究部の部員はそいつ一人だよ
 女1 ええ？
 男4 さあみんな、超常現象研究部に入るんだ
 全員 嫌だ
 男4 覚えてろよ
 男4 退場
 女1 やつと帰った
 男1 面倒臭い奴だったな

男3 ありがとう
 男1 え？
 男3 あいつを追っ払ってくれて
 男1 ああ、いいよ
 男3 部長、新入部員です
 女1 私、入部してもいいんですよね？
 男3 もちろんだよ
 女1 女1です。よろしくお願いします
 男5 よろしく。俺は部長の男5だ。分からないことがあったら何でも聞いてくれ
 女1 はい
 男5 で、君たちはどうするの？
 男1 え？
 男2 どうするって？
 男5 入部するんだろ？
 女1 見えるんですか？
 男5 ああ
 男3 部長、この人たちは幽霊と死神なんですよ？
 男5 さつき、幽霊はウチの新入部員だって言ったろ？
 女1 幽霊が入部していいの？
 男5 細かいことは気にするな
 男1 男1です。よろしくお願いします
 男2 え？
 男3 よろしく
 男2 ちよっと待てよ
 男1 そういうわけで、お前も入るんだよな？
 男2 何で？
 男5 死神も演劇部員だ
 男2 えー？
 男1 よろしく
 女1 いいのかな？ 本当に
 男1 細かいことは気にするな

男4登場
 男2 あれ？
 男3 まだ何か用か？
 男4 頼みがある
 女1 何？
 男4 考えを改めた。誰も超常現象研究部に入ってくれないなら、俺が演劇部に入ればいい
 男1 は？
 男4 お願いします。演劇部に入れてください
 全員 ええー？
 女1 『竹取物語』を演じる。
 女1登場
 女1 むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがおりました。二人は竹細工を作って暮らしていました。ある日、おじいさんが竹を切りに行くと、林の中に光り輝く竹がありました。おじいさんがその竹を切ってみると、中からかわいらしい女の子が現れました。おじいさんとおばあさんはその女の子にかぐやという名前をつけ、たいそうかわいがって育てました
 男2、男5登場。
 男5 かぐや、こんなところで何をしてるんだ？
 女1 おじいさま
 男2 夜風に当たると体が冷えてしまいますよ
 女1 おばあさま。いえ、月を見ていたのです
 男2 月？
 女1 はい。月を見ていると、何だか懐かしい気持ちになるんです

男5 月か
 男2 綺麗な三日月が出ていますね
 男5 ところでかぐや、あの話は考えてくれたか？
 女1 それはもうお断りしたはずですよ
 男2 帝の妻になれるなんて、光栄なことなんですよ
 女1 分かっています。でも、それはできません
 男5 どうしてもか？
 女1 ごめんなさい
 男5 困ったな
 男2 求婚してくる男もたくさんいるというのに。結婚する気はないのかい？

男3、男4登場。

男3・4 かぐや姫
 女1 あなたたち
 男2 ほら、噂をすれば
 男4 姫、結婚してください
 男3 待てよ、俺が先に来たんだぞ。姫、結婚してください
 男4 姫にお前は相応しくない。諦めろ
 男3 お前に言われたくないね
 女1 帰ってください
 男3 どうして？
 男5 お前らじゃダメだよ
 男4 お父さん、娘さんを僕に下さい
 男5 気安くお父さんなんて呼ぶんじゃないよ
 女1 この前お願いしたものは、持ってきてもらえたんですか？
 男4 それは……
 男3 まだ……
 女1 だったら約束と違います。結婚するわけにはいきません
 男2 そうですね。かぐやが欲しがってる物も持って来られないような使えない男は認められません
 男3 そんなこと言ったって。蓬莱の玉の枝なんて、どこにあるって言うんですか？

男4 燕の子安貝なんて持ってこられるわけないだろ
 男5 約束は約束だ
 女1 帰ってください
 男4 お願いです、姫

男5 いい加減にしろ。かぐやは帝の求婚も断ったんだぞ。お前らみたいなと結婚するわけないだろ
 男2 そうですよ。あなたたちのような下種野郎はかぐやに相応しくありません
 女1 やめてくださいおばあさま。おじいさまも。この人たちは悪くありません
 男5 でもこいつら嫌いなんだろ？
 女1 ええ、嫌いです
 男4 正直に言われると傷つくな
 男3 うん

女1 でも、こんなに一生懸命になつてくれてるんですよ。あまり悪く言わない
 男2 じゃあ、あなたは誰と結婚したいの？
 女1 それは……

男1登場。

男1 かぐや姫
 女1 男1様
 男5 何だお前は？
 男1 逃げるんです、姫
 女1 逃げる？
 男1 説明してる暇はありません。早く
 女1 ええ

男1、女1退場。

男3 え？ かぐや、どこへ行くんですか？
 男4 ちょっと待て。おい
 男2 追いかけてちょうだい。早く

全員退場。

男1、女1登場。

女1 一体どうしたんですか？

男1 帝の求婚を断ったそうですね

女1 ええ

男1 それで帝が怒ったんです。あなたを無理矢理連れて行くつもりだ

女1 え？ そんな

男1 でも、あなたを渡すわけにはいきません

女1 男1様

男1 お願いがあります

女1 何ですか？

男1 私と一緒に逃げてください

女1 帝に逆らうつもりですか？

男1 仕方ありません

女1 一生追われ続けるのですよ。それでもいいのですか？

男1 覚悟はできています

女1 あなたに話しておかなければいけないことがあります

男1 何ですか？

女1 私は、月からやって来たのです

男1 え？

女1 私は月の住人です。この世界の人間ではありません

男1 ……突然そんなことを言われても、信じられません

女1 信じられなくても、事実なんです。もうすぐ月に帰らなければなりません

男1 だから帝の求婚も断ったのですか？

女1 ええ

男1 では、私のお願いも聞いてはいただけないのですね

女1 ひとつお願いがあります

男1 何でしょう？

女1 私を月へ連れて行ってください

場面、元に戻る。

全員登場。

男4 なんていい話なんだ。最高だ。素晴らしいよ

男1 どうか？

男5 いいじゃないか。グッドだよ

男3 この脚本は？

男1 昔、上演するはずだったんだけど

男3 けど？

男1 本番直前に俺が死んで、結局上演中止になった

女1 どうして死んじゃったの？

男1 交通事故だよ。それが心残りなんだ

男3 そっか

男4 是非やろうじゃないか。我々演劇部は全面的に協力するよ

女1 もう我々って言うてる

男3 演劇部はお前のものじゃないぞ

男4 固いこと言うなよ、相棒

男3 言っておくけど、お前は新人生と同じ扱いだからな

男4 頼んだぞ、下っ端

男5 ええ？

男4 どう？

女1 すごくいい話だと思う。やってみたい

男1 本当？

男2 ちよっと待ってよ。お前が出るのか？

男1 そうだよ

男2 無理に決まってるだろ。お前の姿は見えないんだぞ

男1 でもここに居る人はみんな見えるよ？

男4 そうだな。俺も見えるようになったし

男1 さっきはすみませんでした

男4 いや、いいんだよ。幽霊に殴られるってのも、ちよっといいかもしれない

男5 お前、気持ち悪いよ

男4 褒めてないよ

男2 こいつが見えるようになってきたのは、多分この子が原因だ

女1 私？
 男2 どうしてこの子に見えるようになったのかは分からないけど、そういうこととは稀にある
 男4 この子が周りに影響を与えてるのか
 女1 どういうこと？
 男4 集団での超常現象体験ってのは割と事例があるんだ。サイキックパワーを持った人間を媒介として、その場にいる複数の人間が怪奇現象を体験できる
 男2 ま、そういうことだね
 男1 よく分からない
 男3 もっと分かりやすく説明してくれよ
 男4 バカには理解できないよ
 男3 何だと
 女1 このままいけば、誰にでも見えるようになるってこと？
 男2 そういう可能性もある
 男4 存在が馴染んできたんだ
 男5 じゃあいいじゃないか
 男2 ダメだよ
 男1 諦める。もう入部しちゃったんだから
 女1 何か問題があるの？
 男2 幽霊は生きてる人と関わっちゃいけないんだ
 女1 どうして？
 男2 それは……色々問題があるから
 男4 固いこと言うなよ
 男2 何であんたが乗り気なんだよ
 男4 幽霊と共演することなんて、もう二度とないんだぞ。このチャンスを逃してはいけない
 男2 そんなチャンスはなくていい
 女1 ねえ、あなたの目的はこの脚本を上演することなんですよ？
 男1 うん
 女1 目的が達成されれば、この世にいる理由はなくなるのよね？
 男2 え？
 男1 うん、まあ

女1 だったら、劇が終わったら冥界に連れて行けるんじゃないの？
 男2 それはそうだけど
 女1 私も協力する。いいでしょ？
 男1 頼む
 男2 勝手にしろ
 男5 決まりだな
 男3 では、次の公演はこの『竹取物語』をやるということで
 拍手。
 男5 早速キャストを決めようか
 男3 主役はこの二人ですよ
 男5 男1と女1だな
 男1・女1 よろしくお願いします
 男3 部長はどうします？
 男5 俺はいいさんやるよ。お前、ばあさんな
 男2 え？ 俺？
 男3 よろしくお願いします
 男2 ちよつと待って、俺も出るの？
 男1 当たり前だろ。これで人数ちようどなんだから
 男2 だからって…何でばあさんなの？
 男5 つべこべ言うな。見苦しい
 男2 出るなんて一言も言っていないのに
 男3 じゃあよろしくお願いします。残ったのが俺と俺だな
 男4 この二人で求婚者か
 男5 任せろ。完璧な演技を見せてやる
 男4 スタッフはどうします？ 音響とか照明とか
 男3 誰か暇な奴に頼めばいいだろ
 男5 それなら俺にアテがある。聞いてこようか？
 男4 え？ あんた友達いるの？
 男1 いるよ。失礼な
 男4 じゃあ頼む。俺は脚本をコピーしてくるよ
 男3

男5 ほら、行くぞ
男2 え？ 俺も？
男5 働け雑用
男2 ちよっと待ってよ、雑用っていつ決まったんだよ

男2、男3、男4、男5退場。

女1 今の脚本って、誰が書いたの？
男1 主役の女。変わった奴だったよ。頑固っていうか、ちよっとずれてる
女1 あなたが生きてたのって、いつ頃の話？
男1 いったらう？ もう二十年以上前だよ
女1 そんなに？
男1 うん、そんなに
女1 二十年以上も幽霊やってるの？
男1 そうだよ
女1 一人で？
男1 死神がいたよ
女1 あの人？
男1 ああ
女1 二十年以上もずっと？
男1 そうだよ
女1 あなたも頑固だけど、あの人も相当頑固ね
男1 そう？
女1 どうして？
男1 え？
女1 どうしてずっと幽霊でいるの？
男1 言つたら、あの脚本が心残りなんだ
女1 あの脚本はそんなに大事なもののなの？
男1 質問ばかりだな
女1 だって気になるんだもん
男1 気にするなよ、大したことじゃないから
女1 大事なことなの。お願い
男1 うまく答えられない

女1 じゃあ質問を替えます。どうして演劇部に入ったの？
男1 あいつに誘われたんだ
女1 あいつ？
男1 さっき言った女。カヨって言うんだ
女1 カヨ？

橋本カヨ。強引なんだよ。いきなり演劇部に入らないかって言われて、無理矢理主役にさせられて

そうなんだ
人の話を聞かないんだよな。自分で勝手に決めて他人を巻き込んでいく
嫌だったの？

え？
演劇やるの
最初は嫌だったよ。でも、やってるうちに楽しくなってきた。あんたは？

え？
あんたはどうして演劇部に入ったの？
お母さんに勧められたの
へえ

この学校に入学するなら、絶対演劇部に入りなさいって
どうして？
私のお母さん、ここの演劇部だったんだ

そうなの？
うん。もう二十年以上も前の話

二十五年前。
全員登場。

男4 おい、カヨ。どうしてこんな奴連れて来たんだよ
男3 そんな言い方するなよ。一生懸命やってくれてるんだから
男4 何が？ 台詞は覚えられないし、動きはぎこちないし
女1 初めてなんだから仕方ないでしょ
男2 ケンカしないでさ、楽しくやろうよ
男4 俺は反対だったんだ。素人なんか連れて来るの
男3 お前だって似たようなもんだろ

男4 俺の方がもっと上手くできる

男1 やっぱ俺、辞めるよ

女1 待ってよ、お願いだから

男1 俺がいたら迷惑だろ？

男3 でも本番まで時間がないんだし、今から他の人探しても

男2 部長、どうします？

男5 ……え？

男2 話聞いててくださいよ

女1 大丈夫。何とかなるよ。だんだん上手くなってるからさ

男1 どうして俺なんだ？

女1 え？

男1 俺じゃなくても、他にできそうな奴いるだろ？ どうして俺を選んだんだ？

女1 それは……

女1

間。

男1 帰る

女1 え？ ちょっと待ってよ

男1 少し考えさせてくれ

女1 待ってよ、お願いだから

男1退場。

男4 どうするんだよ？

男3 お前がいけないんだろ。あんなひどいこと言うから

男4 本当のことだろ。俺がやった方がマシだ

男3 お前じゃダメだよ

男4 何で？

男3 だってお前、そういうのじゃないもん

男4 そういうのじゃないって、どういうのだよ？

男2 部長、どうします？

男5 ……え？

男2 話聞いててくださいよ

現在。

男2、男3、男4、男5退場。男1登場。

男1 期待されるのって結構つらいんだよね

女1 そう？

男1 よく分からなかったんだ。どうして俺が演劇部に誘われたのか。どうやって

たら期待に比べられるのか分からない。それと

それと？

期待されないのも結構つらいんだよね

女1 そうだね

男1 不器用だからさ、俺。色々上手くできないんだ

女1 演劇部はつらかった？

男1 つらかったよ。でも楽しかった

女1 うん

男1 あのときは逃げ出したけど、もう逃げたくないんだ

女1 うん

男1 俺のわがままだけど、協力してくれる？

女1 うん、いいよ

【5】

『竹取物語』の練習。

女1がいる。男2、男5登場。

男5 かぐや、こんなところで何をしてるんだ？

女1 おじいさま

男2 夜風に当たると体が冷えてしまいますよ

女1 おばあさま。いえ、月を見ていたのです

男2 月？

女1 はい。月を見ていると、何だか懐かしい気持ちになるんです

男5 月か
 男2 綺麗な三日月が出ていますね
 男5 とところでかぐや、あの話は考えてくれたか？
 女1 それはもうお断りしたはずですよ
 男2 帝の妻になれるなんて、光栄なことなんですよ
 女1 分かっています。でも、それはできません
 男5 どうしてもか？
 女1 ごめんなさい
 男5 困ったな
 男2 求婚してくる男もたくさんいるというのに。結婚する気はないのかい？

男3、男4登場。

男3・4 かぐや姫
 女1 あなたたち
 男2 ほら、噂をすれば
 男4 姫、結婚してください
 男3 待てよ、俺が先に来たんだぞ。姫、結婚してください
 男4 姫にお前は相応しくない。諦めろ
 男3 お前に言われたくないね
 女1 帰ってください
 男3 どうして？
 男5 お前らじゃダメだよ
 男4 お父さん、娘さんを僕に下さい
 男5 気安くお父さんなんて呼ぶんじゃないよ
 男3 お父さん、娘さんを僕に下さい
 男5 黙れ小僧
 女1 この前お願いしたものは、持ってきてもらえたんですか？
 男4 それは……
 男3 まだ……
 女1 だったら約束と違えます。結婚するわけにはいきません
 男2 そうですね。かぐやが欲しがってる物も持って来られないような使えない男は認められません

男3 そんなこと言ったって。蓬莱の玉の枝なんて、どこにあるって言うんですか？
 男4 燕の子安貝なんて持ってこられるわけないだろ
 男5 約束は約束だ
 女1 帰ってください
 男4 お願いです、姫
 男3 姫
 男5 いい加減にしろ。かぐやは帝の求婚も断ったんだぞ。お前らみたいなのと結婚するわけないだろ
 男2 そうですよ。あなたたちのような下種野郎はかぐやに相応しくありません
 女1 やめてくださいおばあさま。おじいさまも。この人たちは悪くありません
 男5 でもこいつら嫌いなんだろ？
 女1 ええ、嫌いです
 男4 正直に言われると傷つくな
 男3 うん
 女1 でも、こんなに一生懸命になってくれてるんですよ。あまり悪く言わないでください
 男2 じゃあ、あなたは誰と結婚したいの？
 女1 それは……

男1登場。

男1 かぐや姫
 女1 男1様
 男5 何だお前は？
 男1 逃げるんです、姫
 女1 逃げる？
 男1 説明してる暇はありません。早くええ
 女1、その場にうずくまる。
 男1 どうしたんだ？

男4 大丈夫か？
 男1 おい、しつかりしろ。女1
 男3 様子が変だぞ
 女1 ごめんなさい、大丈夫。ちよつとクラクラしただけ
 男1 ちよつとつてことはないだろ
 男5 貧血か？
 男3 保健室に運ぼう
 男5 いや、下手に動かさない方がいい
 男4 横になってるんだ
 女1 大丈夫、少し休めば落ち着くと思うから
 男1 一体どうしたんだ？
 男2 お前のせいだよ
 男1 え？
 男2 お前がこの子に近づいたからだ
 男5 どういうことだ？
 男2 死んだ人間は生きてる人間と関わっちゃダメなんだ
 男3 どうして？
 男2 死んだ人間と一緒にいると、生きてる人間はエネルギーを失っていく
 男1 だから女1は倒れたのか
 男2 そうだよ。初めは貧血くらいで済むけど、このまま続くと危ない
 男1 危ない？
 男2 死ぬ
 男1 どうして最初に言わないんだよ
 男2 止めただろ、何度も。生きてる人と関わっちゃいけないって。でも聞か
 男1 なかったじゃないか
 男1 最初から知ってればこんなことしなかったさ
 男2 言っちゃいけないんだよ。そういうルールなんだ
 男1 どういうことだ？
 男2 死神の役目は死んだ人間を冥界に連れて行くことだけ。幽霊の邪魔をして
 男1 はいけないたとえそいつが死神になろうとしても
 男4 死神になる？
 男2 死神が人を殺すんじゃない。人を殺した幽霊が死神になるんだ

間。

男2 このままだと、お前はこの子を殺すことになる

男1、出て行く。

女1 あなたは最初から知ってたの？ 私が死んじゃうってこと

男2 うん
 女1 知ってて、黙って見てたの？

男2 うん
 女1 出てって

男2 ……
 女1 出てってよ

男2、出て行く。

【6】

男1がいる。女1登場。

女1 見つけた

男1 ……
 女1 やっぱりここにいた

男1 何しに来たんだ？
 女1 ひどい。ずっと探してたのに

男1 俺に近づくな
 女1 どうして？

男1 分かってるだろ
 女1 分からない

男1 それ以上近づいたら舌嚙んで死んでやるから
 女1 もう死んでるんでしょ
 男1 帰れ

女1 ねえ、聞いてよ。ずっと考えてたの。どうして私にはあなたが見えるのか
 男1 ……
 女1 きつと私のお母さんのおかげだね
 男1 お母さん？
 女1 私のお母さん、カヨっていうの
 男1 ……
 女1 旧姓橋本カヨ。あの脚本はお母さんが書いたんだね。だから私にはあなた
 が見えるの
 男1 お母さんは元気？
 女1 うん
 男1 そっか
 女1 あなたの話は聞いたことないけど、演劇部はすごく楽しかったって言っ
 てた
 男1 俺のこと恨んでるんだろ
 女1 どうして？
 男1 逃げ出して、勝手に死んじゃってさ
 女1 恨むわけじゃないじゃない
 男1 俺はもう芝居はしない
 女1 諦めるの？
 男1 仕方ないだろ。このまま続けたら、あんたは死ぬんだぞ。あんただけじゃ
 ない。他の奴らだって
 女1 私は死なない
 男1 え？
 女1 私は死なないから大丈夫
 男1 何言ってるんだよ。大丈夫なわけないだろ
 女1 やらせてよ。あのお芝居、やりたいの
 男1 ダメだ
 女1 誰かが止めたって、私はやる
 男1 ひとつお願いがあります
 女1 え？
 男1 私を月へ連れて行ってください
 女1

女1 私はまだこの世界にいることはできません。でも、あなたが逃げようと言
 つてくれて、本当に嬉しかった
 男1 やめるんだ
 女1 月へ行きたくありません。でも、あなたと一緒になら私はどこへでも行
 けるのです
 男1 やめろ
 女1 たとえこの身が露と消えようとも、あなたと一緒にいられるのなら構いま
 せん。私と一緒にいてくれますか？
 女1
 男3、男4、男5登場
 男4 見つけたぞ、男1
 男1 みんな
 男3 姫を返せ
 女1 え？
 男4 ごめんなさい。私はこの人といいたいです
 女1 この男に誑かされたか。許せん
 男4 かぐや、帰って来るんだ
 男5 おじいさま。私はもう帰りません
 女1 なぜだ
 男5 みんな、どうして？
 男1 やるって決めたろ
 男4 あれで終わりっていうのも後味悪いしな
 男3 素直じゃないな、お前は
 男4 何だと？
 男3 放っておけないって言えばいいだろ
 女1 みんな、ありがとう
 男5 まだ終わってないぞ
 男4 さあ、どうするんだ
 女1 私はこの方の側を離れません
 男3 どうしても言うなら
 男4 力づくでも連れて帰るぞ

男2登場。

男2 やめる。これ以上続けたら本当に死んじゃうぞ
男5 ばあさんや

男2 芝居なんかやってる場合じゃない。男1、行くぞ
男4 どこへ行くんだ？

男2 冥界に決まってるだろ。今ならまだ間に合う
男3 邪魔をするな

男5 怪しげなことを言いおって。貴様、帝の手先だな
男2 何それ？

男5 ばあさんの振りをして周りを欺くつもりだろうが、わしの目はごまかされ
男2 そんな設定なかっただろ

男4 帝に姫は渡さない。帰れ
男3 姫、帰りましょう

女1 男1様、助けて

男5 かぐや、言うことを聞くん
男2 何で誰も俺の言うことを聞かないんだ

男4 男1、貴様の好きにはさせんぞ
男2 男1

男3 男1
女1 男1様

間。

男1 下がれ下郎共。姫は渡さない
女1 男1様

男1 一緒にいてくれますか、というあなたの言葉、私は何より嬉しかった。私
男4 男1、貴様に姫はやれん

男1 それはこっちの台詞だ。貴様等に姫を渡せるか
男2 男1、ダメだ

男1 どこへでも連れて行きます。私は姫のためなら空だって飛んでみせましょ
女1 う

男2 ありがとう
女1 ダメだ

男1 姫は誰にも渡さない。道を開ける
女1 私はいつまでもあなたの側に

男2 男1

女1倒れる。

男1 女1？ 女1

【7】

二十五年前。
男1と女1がいる。

女1 男1君よね？
男1 え？ うん

女1 私、橋本カヨ
男1 知ってるよ。同じクラスなんだから

女1 私、演劇部なの
男1 うん

女1 脚本書いたの
男1 うん

女1 キヤストが足りないの
男1 うん

女1 男1君、出てくれない？
男1 え？

女1 お願い
男1 俺？

女1 うん

男1 どうして？
女1 考えてみてね。お願い

男2 先に行くから。早く来いよ

【8】

男1と男2がいる。

男1 どうして俺を止めたんだ？

男2 見てられないからさ。勝手なことばかりしやがって

男1 幽霊の邪魔をしちゃいけないんだろ？ ルール違反じゃないのか？

男2 いいんだよ。俺は俺のやりたいようにしてるだけだ

男1 お前は？

男2 え？

男1 お前は死神だよな

男2 うん

男1 元々幽霊だったのか？

男2 うん

男1 お前は人を殺したのか？

男2 うん

男1 そうか

女1登場。女1には二人が見えない。

男2 あの子、死ななくてよかつたら

男1 うん

男2 もうお前のことはあの子には見えないよ

男1 みたいだな

男2 でも

男1 ん？

男2 見えなくても分かるのかもしれない

女1、男1を見ている。

男2退場

男1と女1は見つめ合っている。

男1は黒板に「バイバイ」と書く。

男1退場。女1は黒板の文字を見つめる。

終わり。

【参考】

『竹取物語』

※1 『週刊少年ジャンプ』（雑誌）

※2 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』秋本治（漫画）

※3 『DEATH NOTE』大場つぐみ・小畑健（漫画）

※4 『大都会』クリスタルキング（楽曲）